

# 異文化コミュニケーション教育の視点からみたテレビ会議の学習効果 —日本人学生と留学生—

長谷川典子

当小論は、日本国内の2大学をISDN回線で結び、日本人学生とアジア系留学生の間で行われたテレビ会議を取り上げ、異文化コミュニケーションの観点から主として日本人学生が何を学び、いかなるコミュニケーション上の問題に直面したかについて分析したものである。会議における発言量、回数、会話の主導権、流れの様子などの分析から、会議全般は留学生主導型で進んだことが判明し、日本人学生は母語で対応しているにも拘わらず討論への参加においては消極的なままで終始し、留学生の質問に対しても不十分で個別的経験に基づいた返答しか出来ないなど、議論の進め方や発言形態に関して多くの困難に直面した。しかしながら、彼らは留学生の視点から見た日本人、日本社会を知り、また、自らの考えを相手に説明せざるを得ない立場に立ったことで、主体的に考え、発言することの重要性に気づき、と同時に自らの伝達能力の未熟さや視野の狭さを痛感するなど、当テレビ会議に参加したことに大きな意義があったといえよう。

## キーワード

異文化コミュニケーション教育 日本人大学生 留学生 テレビ会議 コミュニケーションスタイル

## 1. はじめに

当小論では日本人学生と留学生の間で行われたテレビ会議を取り上げ、異文化コミュニケーション教育の観点からその学習効果について分析する。ここで取り上げるテレビ会議は千葉県にある私立外国語大学の学生および大学院生の有志6名と神奈川県にある私立大学に留学中である留学生有志6名および、各大学側ともに1名の教員がコーディネーターとして参加したものである<sup>1)</sup>。

当会議の目的は大学内に留学生が存在せず、普段直接的に留学生と接する機会の少ない日本人学生に対しテレビ会議という場を借りて彼らとコミ

ュニケーションをする機会を与え、その体験を通して、通常の授業では得られない何らかの学びをさせる可能性を探ることであった。そのため、当小論では主に日本人学生の側からの学びについて焦点を当てる。まず、会議の全体的な流れと当日の会議の様子を簡単に紹介した上で、参加者の会議への参加度そして日本人学生が会議後記した感想文の内容などの分析を通して当会議を異文化コミュニケーション教育の観点から考察する<sup>2)</sup>。

## 2. テレビ会議の概要

当テレビ会議を行うにあたっては、同大学とオーストラリアの大学を結んで行った実験授業の際の知見を参考にし、可能な限りお互いの意見交換を中心にすることが肝要であろうということがコ

ーディネーター間で話し合われた<sup>3)</sup>。そのため、共通のビデオ教材を使用し、その後お互いに視聴したビデオに関する討議をするという形で会議を行うことにした。実際に使用したのは、異文化コミュニケーション教育用としてディスカッションを30分間に編集したビデオであり、この中では留学生が日本での生活や日本人について忌憚のない意見を交わしている<sup>4)</sup>。次に、この視聴ビデオの内容を簡単に紹介する。

## 2-1 ビデオ「留学生に聞く」

当ビデオは認知的側面が重視されがちである講義中心の大学における異文化コミュニケーション論の授業で補助教材として使用する目的で作成されたものである。具体的には、留学生と交流する機会のない日本人学生達が、日本で留学生として生活している学生たちの生の声を聞き、自分たちが当たり前と考え、意識することのない日本文化が異文化からの人々にはどのように映っているのかを知ることにより、彼らの視野の拡大につなげることを目的として企画されたものである。ビデオに登場するのは千葉県内の私立大学の留学生5名(中国人3名、韓国、マレーシア人各1名)と彼らへのインタビューを行う、大学の留学生センターの日本人スタッフの計6名である。ビデオでは、インタビュアーが進行役を務め、参加者は日頃感じている対人関係における諸問題や日本人に対する印象など忌憚無く話をしてしている様子が写し出されている。当会議のために使用したのは約90分間続いたインタビュー記録を30分に編集したものである。以下に編集されたビデオで話された内容を簡単に記す。

- 1) 日本でのアルバイト(待遇が日本人と違って、自分だけボーナスが出ない)
- 2) 困難の伴う部屋探し
- 3) 自動車学校でのエピソード(日本名を名乗っていないことに対して日本人係官から受けた苦情)
- 4) 不思議に思う日本人のコミュニケーション

(「お出かけですか」「ええ、ちょっと」という会話、「お前」と呼ばれること、親に対する言葉遣いの悪さ)

- 5) あいまいな日本人のコミュニケーション(「また、今度ね」「ちょっといいですか」等)
- 6) 容易ではない友達づくり
- 7) 日本社会でのカルチャーショック(生活上の困難、身体的症状の伴うカルチャーショック)
- 8) 大学生と大学での授業(自分の身の回りのことにしか興味がなく、勉強もしない大学生、一方通行に終始する授業)

## 2-2 会議の流れ

以下ではテレビ会議で交わされた会話の展開を簡単に紹介する<sup>5)</sup>。

まず、会議は初対面同士の堅さを和らげる目的で自己紹介から始まった。留学生からの要請で日本人学生が年齢と専門を一人ずつ述べた。その後、留学生が出身国、専門、来日後の年数について自己紹介を行った。自己紹介の後、コーディネーターからの要請で「日本語はどこで覚えましたか。」という質問が日本人学生から出された。2名の留学生がそれに答え、次に留学生からは「…レポートで徹夜してたんですけども、みなさん、ちゃんと眠れましたか。」という問いかけがなされた。日本人学生の中にも徹夜でレポートを書いていたという者がおり、場が少し和んだと思われるところで日本人側のコーディネーターからビデオについての感想に移る旨の発言がなされた。

最初に促された日本人学生から出た質問は「どの点に共感しましたか。同じ気持ちになりましたか。普段の皆さんの留学生活で、実際あのビデオの中で言ってたようなことはありますか。」というものであった。それに対し、家を借りる時の状況や入国管理局で感じることは共通しているという答えが1名からあった。その発言に引き続いて別の留学生から入国管理局の審査の様子について

の発言があり、それについて日本人学生からの若干の質問をはさんで、3名の留学生が入国管理局の対応について熱く語った。次に、留学生の1人から図書館で勉強している人があまりいないことにショックを受けたとの発言があった。その後、髪を黄色く染めている若者の多さは日本人の西欧崇拜を意味するのではないかという意見が留学生から出された。その発言に対して日本人学生は反論を試みるが留学生は納得せず、さらに質問を重ねていた。

次に3名の留学生から中国人や韓国人の友達よりアメリカ人やイギリス人の友達がいる人を偉いと感じることがあるのではないかという質問が出されるが、これに対しては1名の日本人学生から「そういう人もいると思うんですけど。」という肯定の後、自分には韓国人の友達が2名いるという発言がなされた。留学生からは、「2人だけですか。」という質問の後、「お友達になりましょう」とお互いに言い合って笑いが洩れた。

その後、留学生からビデオを見て、どこに興味を抱いたかという質問がなされた。その質問に続いて、日本人学生からは来日して楽しい経験より嫌な経験の方が多かったかという質問が出されたが、これに対しては留学生から、人間は悪いことの方が印象に残るものであること、そして1、2年前の自分であったら、ビデオの中の留学生達と同様の発言をしたらだろうが、現在では他の国と同様に日本には良いところも悪いところもあると考えているといった旨の意見が述べられた。次に、タイからの留学生がタイについての日本人のイメージが悪く「あちこち行くときには、水牛で（に）乗るんですか。」「家には冷蔵庫ありますか。」等失礼な質問をされた経験を語った。

この後、留学生から日本人学生に向けて質問を求める発言があったため、タイからの留学生の発言には何もコメントがなされないまま次の話題に移行した。そして、ここで、日本人学生から、留学生が先に述べていた空いている図書館についての反論が「私たちはちょっと違うよって言いたい

んですね。」という発言から始まった。日本人学生からは「勉強していない人もいるだろうし、出席をとらない授業はもう出ないという人も確かにいるけども、私たちは結構勉強してます。」という発言がなされたが、それに対し留学生からは勉強というのは教科書的な勉強ではなく、歴史認識を含めた広い勉強であり、他人が不快感を感じることを言わないといった心遣いが欲しい、と日本人全般に対する要望が述べられた。それに対し日本人学生からは「それは、日本人、私たちを含めてそれは本当にこれから勉強していかないといけないことだなというふうに今意見を聞いてすごく思いました。」という返答がなされた。その返答に対し、留学生の一人が「ありがとうございました。」と述べるが、他の留学生からは歴史認識について「…話すときは謝りをして、実際の本音は変わらないんですね。」と手厳しい意見が出された。

その後、日本人学生からあまり発言の無い留学生に対して日本の第一印象を問う質問がなされた。留学生からは大学生は遊びすぎで電車の中で漫画を読むなど幼稚に感じるという発言があった。それに対し、1名の日本人学生からは同意を示す意見があったが、他の日本人学生から漫画を擁護する意見も出された。その後、漫画について2、3の意見が交わされた後、1名の留学生から今回の議論はもっと時間をかけて話し合うべき事柄であること、お互いに誤解している可能性があるのではないかと感じていることなどが疑問点として出された。次に別の留学生から自分たちの話していることは日本人学生からは偏見であると捉えられているのではないかという疑問とともに、自分の国のことはわかりにくく、外国から来た人の視点の方が客観的であるという可能性が指摘された。これに対しては1名の日本人学生が「あ、それは私たちもよくわかります。」と答えたが、沈んだ様子が画面からわかったのか、留学生が「みなさん、元気だしてくださーい。」と明るく声をかけていた。

ここで、日本人側コーディネーターが2、3のコメントを述べた後、再び留学生に質問をすることを求める発言をし、日本人学生にマイクを渡した。日本人学生からは留学生と初めて会ったときに何を話せばよいか判らず戸惑った経験に続き、そのような戸惑いのために、失礼な事を言ってしまうのではないかという懸念が、実際に日本人に失礼な質問をされると述べたタイ人留学生に向けて表明された。続けて日本人学生から適切な話題を選ぶためにも勉強が必要であると考えている旨の発言がなされるが、留学生からは「そんな勉強なんかなくてもいいと思いますよ。…ただ、人間っていうか、相手として留学生、あるいは外人という意識をあんまりしなくても、…充分会話ってうか交流出来るんじゃないかなと思いますよ。」という発言があり、また続いて別の留学生からは自分の心を開いて相手とつきあう事の大切さ等、留学生との交流方法についての助言がなされた。

その後、同留学生が自分の日本での滞在経験を波にたとえて日本人学生に説明し、来日直後は日本が好きで、その後日本社会に親しむにつれ日本の嫌なところが目につき日本が嫌いになったが、4、5年の滞日経験を経て日本に対しての理解が進んで、現在では「日本人につきあうときは日本の感覚、外国人につきあうときは外国の感覚でつきあわないといけないと思って」いる、と異文化である日本での生活から得た自身の考えを披露した。その後留学生との交流に話は戻り、「心を開いて本気で話しかけて下さい。それで大丈夫だと思います。どうでしょうか。」と日本人学生への問いかけがなされた。それに対しては日本人学生から、まず自分のことを話してみるという自身の交流方法の説明がされた。それに対し、留学生からは「…一生懸命つきあう前に一杯頭の中で考えることが一杯なの。そんなに必要じゃないと思います。まず心の扉を開いて下さい。冷静になる必要はないと思います。本音でつきあって下さい。興味とか、あまり合わなくてもいいと思いますけ

れどもね。」とアドバイスがなされた。

次に、日本人学生からアドバイスをした留学生に対し「どうしても（日本での生活で）納得いかないとかいうところ、まだありますか。」という質問が出された。留学生からの回答は「…自分に納得いくかいかないかというよりも…」自分の目的は何か、将来自分は何をするべきかが大切であるので、「納得のいかないところは、それはほっておいて、自分が先に進んでいきたいと思います。」というものであった。

その後はサッカーや野球が好きかといった軽い話題へと移り、会話が交わされたが、留学生から「あと、5分だけ。ちょっと、もったいないね。今度ゆっくりみんなで長く話してできるように期待しておりますので。」とテレビ会議の時間が残り少ないことが話題に出された。その後日本人学生から「皆さん帰国してから将来どういう仕事に就いたりとか、夢とかはあるんでしょうか。」という質問が出たが、それに対しては「良い質問ですね。皆さんどうですか、夢は持っていますか。」と反対に質問される形になり、1名の日本人学生が「私は、英語の勉強をもっと続けて、海外に留学できればと思っていますが。」と回答した。それに対して2名の留学生と1名の日本人学生が自らの夢を語ったのに続き、留学生の1人が、卒業後はタイにある日系企業で働きたいが、先輩の話によると昇進などで不利な扱いを受けると聞いている、という発言をした。その後コーディネーターが時間が無いことを告げ、最後の発言ということで留学生が卒業後2年くらい日本で勤めたあと、マレーシアでエンジニアになりたいという夢を語ったところで、会議は終了した。

### 3. 参加者の発言回数と発言量

会議における各参加者とコーディネーター役の教員の発話回数、量（語数）、および一回の発話における平均語数は以下の通りであった（表1、表2参照）<sup>6)</sup>。

表1に見られるように発話回数では留学生の合計が日本人学生の合計のちょうど2倍となっており、留学生が盛んに発言している一方、日本人学生が比較的受け身な形で会議に参加している様子が分かる結果となっていた。また、個人の発言回数を見てみると留学生は61回と最も多くの発言をしていた学生を始め、39回、23回、19回とほとんどの学生が数多くの発言をしており、最も少ない学生でも11回となっていた。一方、日本人学生は最も多く発言をした者は40回であったものの、その他の学生は16回、13回、10回と続いており、10回以下の発言回数であった者も2名いた。実質的には、自己紹介のみに参加しただけのような学生も存在しており、積極的に会議に参加して意見を述べようとする学生と聞き役に回ってほとんど参加していない学生に分かれていたようである。また、日本人学生側ではコーディネーターが70回と最も発言回数が多い結果になって

いるが、これは、発言に対して消極的な学生の代わりにコーディネーターが質問の受け答えをしたり、質問を向けるなど会議への介入の必要があったことを物語っている。留学生側のコーディネーターが24回と日本人側のコーディネーターの約3分の1の発言回数であることから日本人学生の消極性が理解できよう。

次に、表2の発話を語数として数えた表を見てみる。この表からも留学生が盛んに発言をしており、またその発言量も日本人に比して多く、約3倍強となっていることがわかる。一人一人の発言量からも、日本人学生で最も多い者が1111語、最も少ない者で142語、平均で482.7語となっているのに対し、留学生では最も多い者が3174語、最も少ない者でも343語、平均で1656.8語となっていた。留学生の半数以上の4名が1000語以上の発言をしている一方、日本人学生では1000語を超えて発言したのはAの学生のみと、当会議が留

表1 参加者発話回数

日本人学生		留学生	
A	40	A	61
B	13	B	23
C	16	C	39
D	8	D	19
E	6	E	15
F	10	F	11
同時発話	0	同時発話	18
学生合計	93	学生合計	186
コーディネーター	70	コーディネーター	24

表2 参加者発話量 (語数)

日本人学生		留学生	
A	1111	A	3174
B	613	B	2618
C	512	C	1689
D	317	D	1075
E	201	E	871
F	142	F	343
同時発話	0	同時発話	71
学生合計	2896	学生合計	9941
コーディネーター	2251	コーディネーター	495

学生主導で進んだことが判る結果となった。

#### 4. 日本人学生の感想—内容分析の結果から

会議に参加後、日本人学生は会議に参加しての簡単な感想文を書くように求められた<sup>7)</sup>。以下に学生の感想を内容分析した結果を記す(表3参照)。

6名中4名がテレビ会議システムを利用する上での不具合や問題点について感想を寄せていた。その中には、「留学生のうち誰が話しているのかわかり難かった。」「映像を観ているのだけれど、話すタイミングがつかみにくくて、言いそびれることが多かった。特に相手の表情というか目を見て話せないのがよけいしゃべりづらいもとだったと思う。」「画面を通してではノンバーバルな点が欠けてちょっと不満なところが多かった。」等のように画面がはっきりしていないことから相手の様子も分かりづらく、やはり普通に対面して会議をしている場合のように話せず、戸惑ったことがわかる内容となっていた。

議論に参加しての感想や気づきについては4名が記していた。4名の内、3名が「日本人の議論下手がはっきりと表れた気がする。」「言いたいことがちっとも言えなかった。」「留学生の方々がlogicalで説得力があると思った。一気に理路整然と話されるので、反論や質問を考えている内にどんどん話題が変わってしまい結局最後にやっとしゃべれた。日本人の学生と全く違う。English teachersでだいぶ慣れたつもりだったがけれど、普

段から慣れていないと結構つらい。」と自分たちが留学生に比べて議論下手でかつ不慣れであることに対する感想を書いていた。その他、1名が「日本人同士で発言する際にお互い気を使って遠慮もあったと思います。」と日本人学生が参加に消極的になった理由に触れていた。

半数の3名が挙げていたのが留学生から何らかの学びがあったというものであった。それらは「留学生に教えられることが多かった。留学生の考え方が非常に前向きで印象的だった。留学生が皆、自分の意見をはっきり述べる姿勢に圧倒された。」「興味本位で出場したものの、そんなに甘いものではなく、現実の留学生が直面しているつらさを初めて知らされ、自分の無知さを感じた。」「留学生が実際体験すること(や)、日本に対して客観的な意見が聞けて勉強になった。しかし、彼らにも日本への誤解が多々あると思う。私も含め日本のことをよくわかってもらうようにアピールや自己主張しないといけないと思う。外国人ということで遠巻きにしてしまう傾向はよくない。アジアに対しての理解不足も反省すべきだと思う。」というように留学生の態度や姿勢から学び、留学生の経験する厳しい現実を目を向けさせられ、日本人学生のアジアへの無知さを再認識し、また自分たちも誤解されないように積極的に発信していかなければならないと感じたこと等が記されていた。

2名が交流意欲が向上し「もっと何時間も話したい。」「近いうちに会って話したいです。」等と記していた。改善点に関しては「相手側のバックグラウンドを事前に知っておきたかった。」「グル

表3 日本人学生の感想

テレビ会議システム	4
議論参加	4
留学生からの学び	3
交流意欲の向上	2
改善点	2
その他	2
計	17 (重複回答のため)

ープ全員各自の意見が聞けたら良かった。…議論があっちこっちにいつてしまうので、2、3のトピックにあらかじめ設定してあると議論がしやすくなるのではないかと思いました。」という意見が挙げられていた。その他では、「共通のVTRを観ておいたので、話題が見つけやすかった。」「すばらしい経験でした。ハイテクを使ってこんなことが出来るようになったとは！…貴重な体験でした。」と何れも肯定的な意見であった。

学生の寄せた感想は彼らが1時間強の短い時間で実に多くのことを学びとったことがわかる内容となっていた。彼らは積極的かつ堂々と自らの意見を述べる留学生と対話することによって、自身が議論下手であると気づき、そして相手に理解されるように発信していく姿勢が大切であることや、自らのアジアや「歴史認識」に対する無知さなどについても学んだようであった。これらの感想から見れば今回のテレビ会議は会議システムの画面に不慣れなことから参加学生は多少の違和感を感じてはいたものの、自らの学びという観点からはかなり肯定的な捉え方をしていることが伺えた。

## 5. 考察

前章では学生の感想から彼らの視点での自らの学びについて紹介した。本章ではまず、会議の進行上の諸問題と学生のコミュニケーション上の問題点を指摘し、その後、異文化コミュニケーション教育の観点から当テレビ会議の学習効果について論じる。

### 5-1 会議進行上の諸問題

まず、会議の進行上の最も大きな問題は自己紹介に割かれた時間が全体の会議時間の約4分の1以上にも及んでしまったことではないだろうか。学生たちも感想文で述べていたように、彼らの慣れ親しんだような鮮明なテレビ画面とはほど遠く、不鮮明で相手の細かな表情などがほとんどわからないテレビ会議システムの画面を通しての会

話であり、かつお互いに全くの初対面という事情を考慮すれば、この程度の時間を割くことが必要であったといえなくもないであろうが、同内容のビデオを見るという共通の体験をして臨んだ会議であることと、今回限りの機会であることを考えれば、やはりできれば事前に情報を交換し、お互いに簡単な自己紹介を文章で交わしておくなどし、当日はできるだけ自己紹介に割く時間を減らし、意見の交換を中心にするよう努力することが求められるのではないだろうか。また、最初の自己紹介の時間については日本人学生が消極的だったせいもあろうが、留学生と対話をしているのが学生ではなく日本人側のコーディネーターになってしまっており、日本人学生の発言がほとんどないという状況が生じていた。日本人学生の発言の少なさを考えれば仕方がなかったとも言えようが、もう少し早く学生にマイクを渡して自主的に発言をさせるように仕向けることが求められたのではないだろうか。

### 5-2 日本人学生のコミュニケーション

次に、お互いの対話がどのように進められたかというコミュニケーションの観点から当会議を振り返り、気づいた点を挙げる。まず挙げられるのは、日本人学生側の消極性であろう。これは、躊躇してしまい、なかなか意見が言えなかったという旨の感想が4名からなされていたことから学生自身が気づいた点であることも判る。実際の会議の場面を振り返ってみれば、例えば、会議の冒頭で、お互いの自己紹介が終了し視聴したビデオについて言及するよう日本側のコーディネーターが日本人学生に意見を求めていた場面があった。しかし、意見を求められた日本人学生は逆に留学生に「えっと、VTRを見てどの点に共感しましたか。…普段、皆さんの留学生活で、実際あのビデオの中で言っていたようなことはありますか。」と自分の意見を言わずに、相手に質問をしてしまった。これと同様に留学生から「きのうのビデオ(を)見てどういうところ(に)興味を持ちまし

たか。…」と質問された時も「私がビデオを見て思ったのは、留学生の皆さんが、日本で生活をしている時に、いろいろいやな経験をされたことが多いな、と思ったんですが、皆さんもやっぱり日本に来て楽しい経験よりは嫌だなと思って感じたことの方が多かったですか。」とやはりほとんど自分の感想は述べず、相手に質問を投げかけて終わっていた。

また、随所で見られたのは、留学生が次々と意見を述べているのに対し、日本人学生は、「はい」とあいづちだけしていたり、マイクを握りながら「ああ、じゃあ…」と言いよどんでいる間に留学生が自分の意見を言い出してしまうという状況であった。日本人学生の質問に対して3名の留学生から次々と入国管理局の問題点についての意見が出された場面があったが、日本人学生はほとんど発言することなく留学生の意見に圧倒されているようであった。また、その間マイクを握って受け答えしていたのは最も積極的に会議に参加していた学生1名だけになっており、他の学生はただ聞いているという状況になっていた。

次に挙げられるのは、議論下手ともいえるほどの日本人学生の返答の不十分さ、不明確さであろう。これについても感想の中で述べられていたもので、会議に参加した学生も気付いたことの1つであることがわかる。会議の中で幾度か見受けられたのが、日本人学生の返答や反論に対し、納得のできない留学生が再び同じ質問を投げかけるというものであった。例えば入国管理局に対する話題の後、留学生側から髪を黄色く染める若者の多さは西洋文化への傾倒であり、伝統文化を捨てていることになるのではという疑問が出された。それに対しては3名の日本人学生が代わる代わる反論を試みていた。しかし、日本人学生の反論は弱く、ただ「いや、私はそう思わないんですよ。」や「真似はしてません。」と紋切り型の返答であったり、説明を試みた学生も「成人式がくれば、着物を着たりとかして、基本的なところはちょっとやっぱり日本人臭いところが残っているという感じ

ですね。表面はいくら外人になっても、内面はやっぱり変わらないというところがあると思います。」と反論の理由としては極めて不十分なものしか出せていなかった。

実際、納得のいく理由が全く出てこないことに業を煮やした留学生からは「…なんか証明のところをちょっと教えて下さいよ。…『してません』、じゃなくて『してません』という断言の理由付けというところをちょっと聞きたいんですけども」と厳しく追及されていた。その追求に対し「私が個人的に思うのは、テレビにでているタレントがああいう髪型をするとみんな真似するんですね…」と安室奈美恵を真似しているだけで西洋文化の真似ではないと考えていることを伝えるが、留学生からは「いや、それだけじゃ私、納得いかないんですけども。…もっと詳しい説明とか何かないんですかね。」とまたもや厳しく説明を求められていた。2度も厳しく追及された日本人学生は「髪の毛を染めたりするのはそれは確かにヨーロッパの人は髪の毛が茶色かったり黄色だったりしますよね。それはその人たちの文化じゃなくて、そういう人種なんですよね。」と説明にならない発言で終始していた。

また、留学生2名から日本人がアジア系の友達より西欧人の友達を作りたがり、また西欧人の友達がいることを自慢に思う傾向があるのではという問題が提起されたが、それに対しての日本人学生の返答は「そういう人もいると思うんですけど、私はすごく韓国に興味があるんで、…韓国人のお友達が2人います。」というものであった。このような数々の例をみていくと日本人学生が如何に議論が苦手であるかわかるが、実際、会議の最後に近づいて留学生からは「…ほとんどこれ、「はい」か「いいえ」、○×っていう形の答えになってしまってると思うんですよ。…」という発言がなされたほどであった。様々な質問や疑問点を挙げても歯切れの悪い意見や説明しきれない日本人学生に対して、相手側の留学生達は少なからず苛立ちを感じている様子が伺われた。



学生の感想文でも述べられていたが、彼らが相手を説得したり理由を説明するということに不慣れで戸惑い、「反論や質問を考えている内にどんどん話題が変わってしまい、すぐに返答できず」、後になってから前の話題を持ち出して返答するといった場面も見受けられた。例えば、タイ人の学生が日本人から失礼な事を言われるといった話題を出したとき、その場では何の返答もなく過ごし、会議も最後に近づいたときに、「それは何を話せばよいかわからなかったからではないか。」という意見が出されていた。また、図書館で勉強している人が少ないといった発言に対しても会議も半ばに差し掛かった頃になって「私たちは違う」と反論がなされていた。学生も述べているように、日頃の友人達とのつきあいや、また大学の授業においても、相手と議論したり相手を納得させるように、説得的に話すという機会に恵まれていない彼らにとっては、当意即妙に返答し、反論する、または相手を納得させるといったことは容易ではないようであった。

最後に、当会議においては日本人学生と留学生が対等の形でコミュニケーションができておらず、終始留学生が先輩で日本人学生が後輩といった形で話し合いが進んでいたことが挙げられる。これは留学生のほとんどが日本人学生より年上であったことも要因の一つであろうが、それだけではなく、やはり会話が進むにつれ、個別的経験に基づいた発言や情緒的反応しか示さない日本人学生の姿がその最も大きな要因と考えられるのではないだろうか。実際、留学生が日本人学生をなぐさめたり、教え、論すように語りかけるといった様子が会議の中でもしばしば見受けられた。例えば、入国管理局の問題についての留学生の発言に対して日本人学生が「そんな、残高まで聞かれるっていうことを…知らなかったんで、みんな驚いて、すごくショックです」と少し感情的に言ったのに対し、「いえいえ、そこまでする必要はないと思うんですけど。我々（が）慣れていていますので、全然。その辺は勘弁して下さい」と明るく留

学生が答えていた。

また、日本の大学生があまり勉強をしないという事について「私たちはちょっと違うよって言いたいんですね。…私たちは結構勉強してます。」と1人の日本人学生が反論した際には「ああ、非常にまじめですね。」と簡単に論すように促され、また「…例えば大学生ならですね、私は勉強というのはですね、…あの教科書的なそういうところの勉強じゃないんですよ。例えばですね、歴史認識とかですね。…そういうことを言って欲しいなという感じしたんですよ。」と考えの浅さを指摘されていた。さらに、会議の最後では留学生が日本人学生に対して留学生との交流方法についてアドバイスする発言が続き、日本人学生が「はい」「はい」と聞いているという状況になっていた。

以上、コミュニケーションの観点から当会議を振り返ってみた。全体として、会議は留学生主導型になっており、日本人学生が非常に消極的で、かつ討議に不慣れと言った姿が浮かび上がった。これは日本人学生が母国語で話し、留学生達は第2、第3外国語である日本語で話すといういわば大きなハンディキャップを背負った状態であったという事柄を考えると、如何に日本人学生が議論や討論が不得手であるかがわかる結果となったといえよう。

### 5-3 異文化コミュニケーション教育からみた学習効果

最後に、日本人学生が当テレビ会議から学んだ点について、異文化コミュニケーション教育の観点から考察する。まず、今回の会議を通して彼らは留学生の見た日本人や日本社会、そして日本文化の一端を知ったことから、異文化の視点からみた自文化を知り、ひいては自らの文化に対する理解を深めたといえよう。文化は、普通その内に暮らす人には最も意識されにくく、外国人のように異なった文化背景を持つ人々に指摘されたり、自らが異文化に身を浸すことによってしか、その姿

を理解することができないものである。つまり、彼らは留学生の目という新たな視点から、不思議な事柄や不可解な現象として、数々の疑問点を提示されることによって自分達が当たり前とみなしている事柄や現象が相手には異なって見えたり、誤解される可能性があるという事実を学んだ。そして、この学びはまた、自らの文化を一時的にはあっても異文化という鏡に映して見ることも意味しており、彼らは、文化背景の異なる人同士のコミュニケーションで起きる諸問題の解決においては必要かつ有効な方法である、自文化を客観視するという体験学習をしたともいえよう。

次に、彼らは異文化コミュニケーションの難しさと、自らのコミュニケーション能力の不足という2つの側面を学んだといえよう。実際の会議において、彼らは自分たちが当然だと思ったことを相手が誤解したり、一生懸命話しても相手が納得してくれない等の数々の経験を通して、言いたいことは簡単には伝わらないということを感じたようだ。つまり、日本語という同じ言葉で話していても相手に自分の考えを伝えることは簡単な作業ではなく、日本人同士とは違って、言わなくてはわかってもらえない、つまり、自ら思考し、積極的に相手に伝えようという意思と共に自分の意見を論理的に整理して発言するという技能なしでは対等に話し合うことはできないということに気づいたといえるだろう。会議の中で何度もあったように、ただ相手に「私はそう思わない。」「違います。」と言っても、理解されない。そして、なぜ、そう思わないのか、なぜ違うのかの説明がなくては相手は納得してくれないのである。こういった体験を通して今回の学生達は留学生と自分たちの「話す、伝える」といったことに対する捉え方の違いに気づき、自分たちのコミュニケーションを考え直すきっかけになったのではないだろうか。

今回、当会議で得られた最も大きな収穫は、彼らが実際に留学生を相手にしての異文化コミュニケーションを体験したということであろう。普通

に大学に通う学生達にとって、英語教員以外の文化背景の異なる人々とコミュニケーションをする機会というのはそれほど多いことではないだろう。ましてや、今回のように留学生が全くといっていいほどいない大学に通う学生にとって日本語を介して自由に留学生達と話し合い、留学生の目から見た日本や日本社会、そして彼らの経験するカルチャーショックなどについて実際に話を聞き、そして彼らの質問に答えるという体験そのものが大きな刺激であり、また学びの場となったと言えよう。今回の会議から彼らはたとえ70分という限られた時間ではあってもそれに参加することにより、文化背景を異にする人々とのコミュニケーションの難しさを経験し、自らのコミュニケーション能力の未熟さや、視野の狭さを知り、また、日本や日本文化について説明するという立場に立たされたことで主体的に考え、明快に発言することの大切さをも知ったのではないだろうか。

さらに、今回の会議が日本人学生同士のディスカッション、ビデオ、あるいは図書、文献等の二次的資料や講義と比較してもより高い、また異なった学習効果が期待されることを指摘したい。それはまず、今回の学びが実体験を通して得られたものであり、実体験を通しての学びは簡単に忘れないことから理解されよう。また、異文化コミュニケーションに関する体験学習については学生がそれらを高く評価し、また講義形式の授業とは異なった教育効果、つまり認知面ばかりでなく感情や行動面をも含めた教育効果が期待できることが判明している(長谷川、1993)。実際の異文化コミュニケーションにおいては不安や怒りといった強い感情が伴うことが円滑なコミュニケーションの阻害要因となり、また主体的に相手と関わろうとする積極的な態度が求められることを考慮しても認知的側面が強調される講義や学生が受け身に終始する事の多い図書等の二次資料のみでは十分な教育効果が期待できないことは明らかであろう。それらの事を考慮しても、今回の会議は学生達に十分な学習効果を与えたといえよう。

#### 4. おわりに

当会議を振り返って最も顕著に浮かび上がってくる事柄は、会議に参加した日本人学生が留学生と対等に意見を戦わせることができなかつたことであろう。国際会議やビジネスの場などでうまく発言できない日本人の姿については語り尽くされている感があるが、今回、当会議には自主的に参加した「話す」意欲のある学生達でさえ、このような結果となったが、これは、残念ながら一般的な日本人の議論下手というステレオタイプを裏付けるかたちとなったとも言えよう。

大学入学以前の教育体制では依然として議論の仕方を学んだり、ディベートやディスカッションをするという機会も少なく、また日常生活の中でも友人同士で意見を戦わせるといった経験のない大学生がこのように急に予期せぬ厳しい質問を投げかけられたり、また日本の大学生の代表のような立場で発言をしなくてはいけないと思われるような状況で、しっかりと相手を納得させるよう論理的に意見を構築し、当意即妙に返答するというのは難しいようであるが、当会議のような機会を経て、自己のコミュニケーション能力が日本という狭い枠組みを越えたときに通用しないものであると自覚することによって今後の自己研鑽の努力へとつながることになれば今回の会議には大いに意味があったと言えよう。

多くの日本人学生にとって異文化コミュニケーションは未だアメリカや欧米諸国の人々と英語でコミュニケーションすることのみを意味するという間違っただイメージで捉えられているのではないだろうか。しかし、現実的には益々国際化する日本社会のあり方から考えても、日本国内にそして実際には身近に存在する留学生や外国人労働者と日本人のコミュニケーション活動や彼らと日本人との共生のあり方について主体的に考える学生をつくることが今後、異文化コミュニケーション教育の中でも中心的に取り扱われるべきであると思

われる。今回のような直接的な対話の機会を通して、学生達は今まで比較的遠い存在であった留学生との交流方法について考え、そして彼らの目からみた日本社会の一端を知った。今回の会議への参加を契機として、日本人学生がアジアの中の一員である自らの立場を振り返り、そして身近な存在として留学生を捉え、また、さらにこれが新たな文化的興味や学習へと繋がればそれだけでも当会議が大きな役割を果たしたと言えよう。

#### 注

- 1) 当会議は1998年12月3日メディア教育開発センターの「メディア技術利用による高等教育の国際化に関する共同プロジェクト」(小林登志生教授プロジェクト主査)の一環として行われたものである。
- 2) 異文化コミュニケーション教育はその目的を「文化相対主義の態度を育成し、文化間の相互理解と相互尊重を目指したコミュニケーション活動を展開できる人材の養成(石井、1996)」としている。
- 3) 日豪間で行われたテレビ会議については久米昭元、長谷川典子「テレビ会議システムを利用した日豪合同授業——分析と考察」『ISDNを用いた日豪遠隔学習プロジェクト総括報告:異文化間遠隔高等教育ネットワーク構築に向けて』メディア教育開発センター研究報告08 1999年を参照のこと。
- 4) 当ビデオは神田外語大学異文化コミュニケーション研究所共同プロジェクト「異文化コミュニケーション教育ビデオの制作」の一環として制作されたビデオの一部である。「異文化コミュニケーション教育ビデオ」については長谷川典子「ケースメソッドによる異文化教育ビデオ——理論的背景と教室での実践例」『英学』平安女学院短期大学英学会、1994年、「異文化間コミュニケーション教育のためのビデオ制作」『異文化間教育』第8号、1994年、久米昭元「異文化コミュニケーション教育用ビデオの

開発とその効果—文化対照法を中心に」『異文化コミュニケーション研究』第12号、2000年を参照のこと。

- 5) 会議の分析に当たり、収録テープを基に、会議の内容は全て書き起こした。ここでは、紙幅の都合上、話題の流れを中心に紹介する。
- 6) 参加者の発話量は会議内容をワードプロセッサに入力し、それを基に計測したものである。
- 7) 留学生は全員会議後アルバイトなどの予定が入っていたため感想を聞くことが不可能であったため今回は日本人学生の感想のみを分析対象とした。

#### 参考文献

- 1) Fowler, S.M. ed. (1995) *Intercultural Sourcebook: Cross-cultural Training Methods vol. 1 & 2*, Intercultural Press.

- 2) Sikkema, M. & Niyekawa A. (1987) *Design for Cross-cultural Learning*, Intercultural Press.
- 3) Sisk, D. A. (1995) *Simulation Games as Training Tools in Intercultural Sourcebook: Cross-cultural Training Methods vol. 1 & 2*, Intercultural Press.
- 4) Paige, R. M. ed. (1993) *Education for the Intercultural Experience*, Intercultural Press.
- 5) 石井敏 (1996) 「異文化コミュニケーション教育」古田暁監 石井敏他著『異文化コミュニケーション』有斐閣
- 6) 久米昭元、長谷川典子 (1999) 「テレビ会議システムを利用した日豪合同授業—分析と考察」『ISDNを用いた日豪遠隔学習プロジェクト総括報告:異文化間遠隔高等教育ネットワーク構築に向けて』メディア教育開発センター研究報告08
- 7) 長谷川典子 (1993) 「異文化コミュニケーション教育へのアプローチ—2つの体験学習を通して」『英学』26号、平安女学院短期大学英学会

(2000. 9. 28 受稿 2000. 11. 24 受理)

## An analysis of videoconferencing between Japanese students and students from Asia: A perspective on intercultural communication education

Noriko Hasegawa

This paper analyzes the nature of interaction between Japanese students and students from Asia in a videoconferencing session conducted between two universities in Japan via ISDN. The analysis showed that most of the Japanese students were reluctant and poor discussants, and that the discussion was mainly led by the international students. From the perspective of intercultural communication, this conference was significant in that the Japanese students were able to gain a new perspective of Japan and its society from the viewpoints of the international students. Moreover, they learned the difficulty of making themselves understood by the international students, and also that their views tended to be somewhat narrower than those of the international students.

#### Keywords :

intercultural communication education, Japanese university students, students from Asia, TV conference, communication styles